

国立歴史民俗博物館本『千載佳句』について

後藤 昭雄

近年の日本漢文学研究の盛行をも語るものとして、漢文学作品の影印・校本・注釈・索引・集成等の刊行、また新出資料の紹介などが相ついでいるが^{注1}、その一つとして『千載佳句』の国立歴史民俗博物館本（以下、「歴博本」と略称）の影印による公刊があつた^{注2}。

『千載佳句』は中国の唐代の詩人（ただし新羅・高麗の詩人四人を含む）の七言詩から二句一聯を摘句し、その一〇八三首を類聚した佳句集である。二巻。村上朝の大江維時（八八八〜九六三）の編纂とされる。本書は日本人が外国文学である唐詩を集成した詩集で、平安朝に成立した詩集のなかでは異色の編纂物であるが、十世紀中頃に作られたものであるだけに、少なからぬ佚詩が含まれていることは貴重である。早く江戸時代に、市河寛齋は『全唐詩逸』を編むに当たって、本書から佚句を拾っている。

『千載佳句』の写本として従来知られていたのは、

松平文庫本

内閣文庫甲本（和学講談所旧蔵）

内閣文庫乙本（林家旧蔵）

国立国会図書館本

の四本であるが、いずれも近世初期あるいは中期の書写にかかる。なかでは松平文庫本が最善本とされ^{注3}、「在九州国文資料影印叢書」（同刊行会、一九七九年）、「松平文庫影印叢書」（新典社、一九九七年）に収められている。これらに対して、歴博本は中山忠敬氏旧蔵の鎌倉時代書写本で、諸写本のなかで最古写本の位置を占める。重要文化財。

『千載佳句』は、現在、さまざまの場で研究に用いられているが、そこで使用されるテキストは、ほぼ間違いなく金子彦二郎『平安時代文学と白氏文集―句題和歌・千載佳句篇』（培風館、一九四三年。覆刊版、藝林舎、一九七八年）である。本書は「帝国図書館蔵にかかる写本」（国立国会図書館本）を底本として、「各作家の詩文集・全唐詩・倭漢朗詠集・新撰朗詠集・続撰和漢朗詠集・全唐詩逸等を参照し」、校訂したものである。

現在、流布本として用いられているこの金子氏編著の校定本（以下「校定本」と略称）に対して、写本の本文はどのような価値を有するのか、歴博本に代表させて、具体的に検証してみよう。

二

まず、詩句の分類、配列が変わるものがある。

校定本によって該当箇所をあげる^{注4}。

初冬

（213・214省略）

215 黄纈纈林寒有葉 碧瑠璃水浄無風

白 泛大湖

冬興

- 216 心灰不及爐中火 鬢雪多於砌下霜 白 冬至夜
- 217 万物秋霜能壞色 四時冬日最凋年 白 歲晚旅望
- 218 清洛曉光鋪玉簾 上陽霜葉剪紅綃 劉禹錫 初冬
- 219 煙波半落新沙地 鳥雀群飛欲雪天 白 歲晚旅望

218と219の配列について、校定本は次のような脚注を付す。218に「案ずるに此の句は219とすべし」、219に「案ずるに原本には「同上」とあれど、作者は劉禹錫にあらずして「白、歲晚旅望」なれば、218とすべし」。すなわち、校定本の原本（帝国図書館蔵本）では、219の作者・詩題注記は「同上」とある。これによれば、218の注記と同じということで、劉禹錫の句となるが、『白氏文集』で確認すると、この句は白居易の「歲晚旅望」の一聯である。すなわち217の注記がそのまま該当する。つまり「同上」である。したがって218と219を前後させた形が正しい配列である、という。

これで一応は解決できたように見える。しかし、これではなお不十分なのである。そのことは歴博本によって明らかになる。次頁の図版を見てほしい。これは歴博本の該当部分である。

これには218の句頭に引き出し線が付されて、この句は215の後に置くべきものという指示がなされている。このようにすれば、219の「同上」は217を受けることになり、正しい注記となる。かつ218は詩題が「初冬」であることから、「冬興」の類題の中よりも「初冬」の類題の下に置かれるのがふさわしい。すなわち歴博本は本来のあるべき形を示しているのである。

上陽落葉飄官樹中渡流澌擁渭橋馬上晚冬
黃纈纈林寒有葉碧涵漪水淨無風冬月

冬興

心灰不及爐中火鬢雪多旋砌下霜冬王亮

万物秋霜能壞色四時冬日最欺年歲晚接望

清洛曉光鋪玉簾上陽霜葉剪紅綃劉禹錫

煙波半落新沙地鳥雀群飛欲雪天同上

金勒寂宜乘雪出玉觴何必待花開白李杜公對南宮後有善從慎端朝之作

次に詩題注記が正される例。

「暮春」部の94・95番の句である。

94 閑聽鶯語移時立 思逐楊花觸処飛

白 春尽日宴龍感事独吟

95 殘鶯着雨慵休轉 落絮無風凝不飛

白 酬李二十侍郎

校定本はそれぞれの詩題注記について、

国立歴史民俗博物館蔵『千載佳句』

国立歴史民俗博物館蔵貴重典籍叢書

文学篇第21巻漢詩文(臨川書店、2001年)

(94) 原本酬李廿侍郎に作る、今(通)によりこれを訂す

(95) 原本春尽日感事独吟に作る、今(通)によりこれを訂す

の脚注を付す。「(通)」とは「通行本白氏文集」をいう。要するに、94と95は詩題注記が入れ換わっているというわけであるが、歴博本はこれに気付いて、先の場合と同じように処置している。すなわち94と95の句頭にそれぞれ引き出し線を付して、両者を互換するように指示して、正しい形を示している。

以下は本文について。

目録の類題。

卷上・下それぞれに目録があり、

四時部 立春、早春、春興、……

のように類題が示されている。このうち、卷上、人事部の「留友」は、校定本は「留友」、歴博本は「留客」であるが、本文の類題は「留客」で歴博本に一致する。

もう一例ある。卷下、草木部に「楊竹」の類題があり、本文において、校定本は「楊柳」、歴博本は「楊竹」で相違する。所収の句は一聯のみで、

635 緑楊近浦堪垂鉤 翠竹当軒好韻琴 路半千
題別業

である。この句の内容から「楊竹」が妥当である。なお、目録は校定本も「楊竹」とする。

詩題注記

257 好看落日斜銜処 一片青嵐映半環 白
高亭

「高亭」という詩題注記は、校定本が『白氏文集』に基づいて補うが、歴博本はこの詩題注記を持つ。

905 騎躡春風離漢苑 心懸秋月照吳関 僧去著
徳征詩

校定本は詩題を「徳征詩」とするが、歴博本は「徳政詩」。「徳征」という語句は用例を見いだしがたい。

953 山雲眇々川程遠 木葉蕭々雁過初 賀蘭遂 客懐

校定本は「客懐」であるが、歴博本は「泡水駅客懐」で、詩が作られた場所を明示する。

954 も同様の例で、

廻雁不伝郷信去 秋風偏向客衣寒 賀蘭遂 贈朱功曹

校定本が「朱功曹に贈る」であるのに対して、歴博本には「長嶺駅贈朱功曹」とある。詠詩の場が明らかになる。

詩句の本文

97 兩岸楊花風作雪

一池荷葉雨侷珠 陳潤 題山陰朱徵君隱居

後句の「作」、歴博本は「成」。一首中に同じ「作」が重ねて用いられるはずはない。後句は「成」であるべきである。

208 晚秋紅葉題詩遍

秋待黃花釀酒濃 許渾 長慶寺題皇甫秀才院

「秋」は歴博本は「収」。対偶をなす後句が「待」という動詞であるから、同じく動詞の「収」でなければならない。また

「秋」は後句の句頭にも用いられていて、この点からも不可。

530 朱紫衣上浮世重

蒼黃歲序長年悲 元 贈別楊員外巨源

「上」、歴博本は「裳」。「衣上」という語は「衣の上」の意で、語としてはあるが、ここでは高位高官を象徴する朱や紫の

衣ということであるから、「衣裳」が正しい。

985 御風煙眇多無伴

入鳥差池不乱群

白
贈隠士

「煙」は歴博本では「縹」。ひょうびょう「縹眇」であれば、疊韻語として後句の「差池」しちちとよく対偶をなす。

1002 身居曉嶂紅霞外

書讀愁窓紫竹間

張蕭遠
借山觀讀書

「愁」、歴博本は「秋」。「愁窓」という語は考えにくい。一方、「秋窓」はごく普通の措辞である。

1023 緑溪摘果霜晴後

出竹吟詩月上初

杜荀鶴
書齋言懷

「緑」について校定本に「縁の誤か」の注があるが、その通り歴博本は「縁」に作る。これによって「溪に縁りて」となり、後句の「竹を出でて」とよく対をなすものとなる。

以上の諸例は歴博本の本文優秀性を示すものである。

三

前節に述べたこととは視点が異なるが、先にも述べたように、金子氏の校定本が現在最も一般的に用いられていることを考えて、付言しておきたいことがある。

校定本は詩人の詩集や『全唐詩』も用いて改定するという方針で作業を行っているが、その結果、平安朝に流布した本文の姿を見えなくしてしまった例がある。

384 錦帳晚開雲母殿

白珠秋写水精盤

章孝標
読韓侍郎本

「晩」は校定本が「原本暁に作る、今(全)による」として改めたものである。「(全)」は『全唐詩』。この句は『和漢朗詠集』(巻下、文詞)に入るが、その本文は「暁」で、多数存する諸本においても「晩」とするものはない。平安朝の人びとは「錦帳暁に開く」としてこの句を読んでいた。

398 も同様の例である。

賀賓喜色欺盃酒

醉妓權声過管絃

白
(詩題略)

「過」は原本の「弄」を、『白氏文集』に拠って、校定本が改めた本文である。この句は『新撰朗詠集』(巻下、慶賀)に入るが、そこでは「弄」で、諸本に異同はない。

詩題・作者注記にも同様の例がある。

607 不知細葉誰裁出

二月春風是剪刀

賀知章
詠柳

校定本は詩題、作者について、次のような注記を付す。

原本、元、垂柳に作る、(全)によれば賀知章の詠柳(一作柳枝詞)と題する詩なり、仍て今これを訂す

この句も『新撰朗詠集』に採録されるが(巻上、柳)、諸本いずれも元稹の「垂柳詩」とし、賀知章の詩とするものはない。

平安朝人は、この詩は元稹の詩として読んでいた。

現在、『千載佳句』の標準的テキストとして一般に用いられている校定本には、このような行き過ぎた本文校定がなされている場合もある。注意が必要である。

『千載佳句』を例として、いまそのいわば定本として用いられている金子氏校定本に対して写本が有する価値を、最近公刊された歴博本に代表させて検証してみた。第二節に挙げた諸例は歴博本の優秀性を示すものである。しかし、一方にはもちろん現在の研究の視点から見れば誤りとみなすべきものもある。しかし、誤りを含み込んだそれもまた、平安時代に流布し、当代の人びとが享受したテキストの姿を示すものである。第三節の例示はその一端である。

なお、論述を複雑にしないために、あえて触れるのを避けてきたが、松平文庫本は歴博本のかかなり忠実な写本であり、第二・三節にあげた例の多くは、この本も歴博本と同じ本文を持っている。そうして、先に述べたように、この本は歴博本のそれに先立って、一九七九年と一九九七年にやはり影印本として公刊されていた。

せっかく良質の本文をもつテキストの公刊も、我々がそれを利用しなければ意味がない。宝の持ち腐れにしてしまうのもつたない。

注

- 1 拙稿「日本漢文学研究の現状と課題」(『二〇〇五年国際シンポジウム報告 世界における日本漢文学研究の現状と課題』二松学舎大学、二〇〇六年)に、その現状を紹介した。
- 2 国立歴史民俗博物館蔵貴重典籍叢書 文学篇第二十一卷 漢詩文(臨川書店、二〇〇一年)。
- 3 金原理「松平文庫本『千載佳句』について」(『平安朝漢詩文の研究』九州大学出版会、一九八一年)参照。
- 4 漢字の字体を現行の通行の字体に改め、返り点、送り仮名を省略する。作品番号はこの本に付されたもの。

(付記) 本稿は二〇〇五年九月三日・四日に二松学舎大学で行われた、同大学の21世紀COEプログラムによる二〇〇五年国際シンポジウム「世界における日本漢文学研究の現状と課題」において、「日本漢文学研究の現状と課題」として発表したものの一部である。